
学校的イソロウのやりかた

鈴詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校的イソウロウのやりかた

【Nコード】

N9020E

【作者名】

鈴詩

【あらすじ】

要約しろって言われたってさ、変人が住み着いてる学校の話とか言い様が無いって。

その1 世界はいま微妙な色

夕方が終わる頃

茜色の空が徐々に暗く黒く色を変えていく 黄昏時

部活動の下校時刻になり楽しげに話しながら校門をくぐっていく生徒たちを

俺は教室の窓から特に何を考えるわけでも感じるわけでもなく、ぼくと眺めた。

この学校には寮は無い。

それなのに、“事情”によって、家に帰ることが出来ない生徒も通っている。

理由はこの学校が格安の私立である事。

理事長の趣味で変わった生徒が集められている事、この2つ。

言っておくは俺は変わっていない、変人じゃない。

完璧人間でも、むやみやたらにかっこいいわけでも、社会不適合者でも、魔女でもない。

県立よりも安くて近所だったからこの高校を選んだ普通の生徒だ。

特に夢らしい夢も無く。

このまま一般と言う流れに乗って大学に行って、適当な会社に就職してそれなりに恋して結婚して

一軒家立てて孫に囲まれている中で縁側に座ってお茶飲んで死ぬんだろうなあ。

とか、漠然とした将来を考えてた。

実際、そんな将来を辿ってただろうし。

この高校に入らなければ。

彼女等に会わなければ

彼等に会わなければ

俺は普通に居られたのに

なあ？、知ってるか？

変人の中の平凡ってこの上なく目立つ特徴になるって

まあ、いいや

ありふれた表現なのは重々承知してるけど

たいした表現が出来るほど俺に詩人の才能は無い。

それでもいいなら聞いてくか？

俺は、周りから見りゃ虚空に視線を漂わせる怪しい男になるだろうけど

たいした問題じゃない。

マジできくのか……愚痴の一つや二つ出るかもしれないけどそれぐらい勘弁してくれよ？

あゝ、昔話は昔々で始まるけどそんなに前の話じゃないもんな。それじゃとりあえず

全ての始まりは入学初日までさかのぼる。

その1 世界はいま微妙な色（後書き）

サブタイトルは御題サイトから貰ってきてます。

配布元 遙彼方

その2 振り向く瞬間のその瞬間

その日はめちゃくちゃ暑かった。

目が覚めた瞬間

あれ？今日、春だよな？4月だよな？

とか、思わず考えながら天井をぼくと見上げた。

動きたくないけど、窓から差し込む直射日光が眩しい。

冬の名残の掛け布団を跳ね除け、布団から這い出るとちよっと涼しくなった。

それでも暑いけど。

とりあえず服脱いで、着替え着替え

制服のブレザーに腕を通す。

長袖、暑いよ。汗で腕が通り難い。

何で黒？なんで黒？

無駄な思考を垂れ流して、着替え終了。

部屋を出て階段を下りてリビングへ。

入学式だと言うのに親は起こしに来るどころか、家にも居ない。

Q、何故でしょう

A、ビデオの場所取りに先に学校に行ってるから

先に言っておくと、うちの両親は決して親馬鹿な親じゃない。

ただ、こういうイベントが大好きなのだ。

去年なんぞ風邪で運動会休んだのに、俺を家において運動会の観戦に行ってた。

そういうのが、俺の両親だ。

ああはならないと心に固く誓っている。

The ☆反面教師 ☆つけたのは気分 英語なのも気分

飯食って家を出る。

ちなみに飯はお赤飯だ、豆がパサパサしてて味付けが塩って時点で俺は嫌い。

家じゃよく出るけど それしかないから食うけど 嫌い。

なんかやたらと粘々してるし、もち米は普通に餅にして食べばいいと思う。

結構歩いたけど、まだ同じ制服を着た学生は見えてこない。

少し早めの時間帯だし。皆、不真面目 俺も不真面目だけど。

ほら、遅刻して先生とか先輩に入学早々目をつけられるとかメンドイじゃん？

寝たいし、学校の方が涼しいよ冷房完備してるはずだし。

この時期についてるか？

ついて無かったら今通り過ぎたコンビニでアイス買って食うもいいか。

てか、このローファー足痛い。

怠惰オーラ振りまきながら、登校の道を歩く。

これから3年間通うはずの道。

これといって坂とか無い平坦なアスファルトの道

春とは信じられないほど強い日差しの照り返しが暑い

通り道にコンビニはさっきの1軒だけ

本屋も何も無いくせに図書館はあった。

めっちゃくちやボロかった 冷房付いてんのかどうかも怪しいぐらいボロかった。

鐘が鳴る

放送の音じゃなくて本物の鐘

とりあえず、腕時計見るも7時半　まだ余裕。

何のため鐘だろ？

そう思って前見たら校門が見えた。

そこから見える、ちょっとした校内の広場の中心に車椅子が一つ。
それに腰掛けてる　長い黒髪を後ろで三つ編みに纏めた　同じ制服
の女子

じっと、校内の敷地内にある鐘がある塔を睨むように見上げてて
その様子が一枚の静止画みたいで　綺麗だなくとかそっけない感想
抱いてから

歩くスピードを緩めないで、全く迷い無く校門の敷地をまたいでそ
の女子の脇をすり抜けた。

話し掛けるなんてしないし　眠いから。

俺ナンパとかしないし　あれって何が楽しんだろうな？

すれ違った瞬間　その女子が目を見開いて俺を見てたのはキツト気
のせい。

てか、気のせいってことにする　めんどそうだから。

この学校1足制だからそのまま校内入って階段登る。

1年の教室は5階　階段登んのかったるかった。

適当な組に入って適当な席に座る。

教室に入ったときエアコンスイッチ押したけど無反応。

エアコンと格闘すんのもめんどくさいんで鞆を枕にして寝た。

入学式が始まるまでの一時をぐっすりと

その2 振り向く瞬間のその瞬間 (後書き)

サブタイトルは御題サイトから貰ってきてます。

配布元 遙彼方

その3 踏んだり蹴ったり躓いたり

目を覚ましたらなんか暗かった。視線を上へ向けたら男子に見下ろされてた。

なんかにこにこにこにこ笑ってるから、目の色わかんねえけど綺麗な金髪だし色白いし外人か？

「おはよ。」

あつ、日本語お上手で。しかもちゃんと現代風

「起きたばっかでわりいけどお前の席1つ後ろだぞ。ほら、さっさと移動しろって。」

言いながら、優雅な物腰で俺の鞆を持ち上げ後ろの席に置く。

こういう奴って普通敬語キャラじゃね？

なんで、めっちゃくちゃふれんどりく？

「どうした？」

喋らず見てたら不審がられた。当たり前か。

「いや、なんでも無い。」

欠伸を噛み殺して後ろの席に移動する。

立ち上がったらやっぱり足が痛かった 靴擦れとかメンドイのに。

ああ、今更だけど俺このクラスなんだ 偶然って偉大。

その様子をやっぱり笑顔で見送る男子……こいつ、もしかして笑顔が常か。

金髪男子は俺が座ってた席に腰を下ろしてこっち振り返る。こっち見なくていいのに。

「僕の名前は、すずき ひろと。」

あつ、僕なんだ。しかも、この見た目で名前が純日本人って？

この学校染めんの禁止だし、天然だよな あ金の髪。

「ちなみに漢字は？」

やっぱ鈴木 広人 らへんか？

「進むに來るで進來。大きいに飛翔のしょうで大翔。よろしくな。」

読み普通なのに、珍しい名前だし。

なんだこいつ。

「……………お前の名前は？」

ひたすらねむそくな視線を向けてたら聞かれた。

いや、別に見てたわけじゃなくてちょうど視線の先にいただけなんだけど。

「俺？俺はもとの とわ。元の野で元野。永遠えいえんで永遠」

「トワだな、よろしくな。」

いきなり呼び捨ての上に親しげに手を差し出してくる。

断るのもかったるかったから適当に握手しといた。

握手しながら壁にかかつてる時計を見る。

8時50分

早く先生こねかな？

その3 踏んだり蹴ったり躓いたり（後書き）

サブタイトルは御題サイトから貰ってきてます。

配布元 遙彼方

その4 適度な嘘と適当な距離

入学式は別に省略でいいよな。
たいした事起こらなかったし。

てか、入学式で理解したのはパイプ椅子で寝ると首が痛くなる 以上。

いや、卒業式でも思ったから再認識か。

先生の号令に従って、同じ髪の色した同じ服を着た生徒たちが
蟻みたいに綺麗に並んで、教室に戻る。

誤解があるとヤダから言うとは別にこういうのが嫌いなわけじゃない。
長時間の集団行動は嫌いだけど 自分の行きたいところにいけないし。

教室でのLHRも終わって、
ロングホームルーム

適当に折ったプリント類を適当に鞆に詰め込む。ハラヘツタしとつ
とこ帰ろう。

鞆を持って教室の引き戸に手をかける。

「トワ。」

気のせいだ 背後からの声と視線と駆け寄る足音は気のせい。

とりあえず、その気配に追いつかれる前に素早く教室から出て扉を
閉める。

ついでに近くにあった箒で扉につっかえ棒をしておく。
逃げる時間を稼ぐため。 あんな目立つ奴と一緒に1年間過ごすつ
もりは無い。

ため息を一つついてから、適当に廊下を歩き出す。
すれ違うのは廊下の近くで駄弁ってる男子女子の皆さん。

素早くお友達を作れるその才能には脱帽します いや、まったく羨ましくないけど。

「トワ〜?!」

あゝ、もう追いついてきた。

振り返らずに、周りを見渡すとちょうど近くで駄弁ってるグループが一つ。

無駄に筋肉ついてるし、体育系部活関係か。

背筋を伸ばして、髪をクシャリと乱したり、眼鏡を外してポケットに突っ込んだり
何時もは全く浮かべない気さくな笑顔というのを顔に貼り付けながら
そいつらに、歩み寄る。

とりあえず、よく喋ってるやつに目をつけそいつが口を閉ざした瞬間を狙って声掛けて

「おっす、久し振りだな。」

「おっす! わりいけど誰だっけ? お前?」

わるくない、当たり前だ初対面なんだから。

でも口に出さない、表情に出さない。

俺って、名役者

「ほらっ、練習試合で会っただろ? 忘れちゃったか?」

「うゝゝゝん? 覚えてないな、お前どこ中だったんだよ。」

「市立緑丘中、本気で覚えてないのか。薄情な奴だな。」

「そんな中学と練習試合なんかしたっけなあ。」

明るめの声を出すように心がけながら、俺の名を呼ぶ声が通り過ぎ。

そのまま遠ざかっていくのを確認する。

いまだ首を傾げつつける、気の良い男子。

お前本気でいいやつだよ、振り込め詐欺に引っかからないように注意しろよ。

「お前は何中だっけ？」

「俺か？岩名中。」

「榛名中じゃなくて？」

「岩名岩名、榛名ってどこだよ。」

「あゝゝゝゝゝ、他人の空似だったばい。手間取らせて本気でわりい。」

頭を下げてその上でパンツと頭の前で手を合わせる。

これって、体良く相手の目から視線外せるよな 考えた奴、頭良い。

「いいって、それより俺たちこれから野球部仮入部しに行くけどおまえも来るか？」

野球部なのか、見たまんまだな。

「いや、俺これからバイトの面接あつてさ。牛乳配達で面接してどうすんだろな？」

「そっか、んじゃまたこんどな。」

もう絶対話し掛けないだろうけどなあ、とか思いながら
ぞろぞろと移動していくグループを見送って。

「あゝ、疲れた。」

背骨伸ばしたせいで何か変な筋肉つった。
まあ、いいや。

眼鏡をかけてから、窓の外を眺める。

……げっ、大翔のやつ校門前でうろうろしてるし。

確か此処って裏門あったよな。

裏に回んのメンドクセ　かといって、正門行った方がめんどくさそうだ。

くしゃくしゃにした髪に適当に手櫛をかけながら

俺は裏門に行くために、階段を下りた。

てか、エレベータあんのに生徒は使用禁止ってケチだよな？

その4 適度な嘘と適当な距離（後書き）

サブタイトルは御題サイトから貰ってきてます。

配布元 遙彼方

その5 予言じゃなくて確信

非常階段が一番裏門に近い階段らしい。

裏門への道を多分一番遠回りのルートで歩きながら思った。

なんでこんな、階段が途中で途切れてたりなんだかって、小迷路なんだ？

城じゃあるまいし、学校でこんな複雑なつくりにして何が楽しいんだ。

「あの〜。」

やっぱ、学校見学ぐらいしとけばよかったか？

あつ、やっぱあんな暑い時期に外、出るのやだわ。

そういや、外まだ暑いな。あのコンビニでアイス買ってくか。

「済みません……。」

アイスなんにしよ。

無難にガリガリ君か？あれは財布にやさしいけどすぐに溶け出すんだよねあ。

がつつりミカン、あれはみかんがガンガン入ってて美味しいでも高い。スイカバーとか売ってつかない？今、春だけど。

「……………」

地球温暖化ってこんな急激だっけ？

あれだな、氷河とか紫外線とかどうでもいいけど電気代がかかりそうでヤダ。

後、アイス溶けんの早くなるじゃん さつさと家帰んなきゃいけないとかもメンドイ。

「……………」

あゝ、ようやく裏門見えてきた。

これで鍵閉まってたら本気で最悪…だ？

なんか、ガラガラガラ音するけど台車でも通んのか。

とりあえず、後ろを確認しようと振り返る。

視界の下隅に黒いなんかが見えた瞬間

膝あたりに衝撃来た。

うん、痛いとか思う前にバランス崩れたし 一歩後ろに下がろうとしたら何かあったし 余計バランス崩れたし。

そして視界に広がる青い空

「あの、大丈夫ですか…？」

青の中に黒が入る。

カラスの濡れ羽色の黒髪、他の色に染めた事とか無いんだろ？な。

顔は微妙な逆光になってるせいでわかんないし、誰だよコイツ。

いや、俺が覚えてる人間とかめっちゃ少ないけど。

「えーと、起きてますよね？ お話し聞いてもらっても、いいですか？」

「ヤダ。」

即答してから、体を起す。

頭打ってないけど背中が痛い、地面が熱い、日差しが暑い、影行きたい。

てか、今日はなんか良く人に覗き込まれるな。

「あつ、でも聞いてくれなきゃ困るんです。」

「それじゃあ、15文字以内に纏めて言って。10・9・8・7・…。」

振り返らないでカウントする。 ついでに立ち上がって砂埃を払っとく。

背後からものすごい慌ててるオーラが来るけど俺しらね。

「…：2・1 はい、どうぞ。」

「私の付き人になってください…：。」

「ヤダ。」

さっきと全く同じ調子で断ってから、後ろを振り返る。

あゝ、どっかで見た車椅子。 何処で見たっけ？ なんかのドラマか。

「でもっ、お給料払いますし。私、車椅子なので移動が…」

理由なんか知らないし。

受ける気無いから説明も不要 簡単だろ？

「別に金が必要なわけじゃないし。」

「お給料が嫌なら他の物にしますから…。」

なんか食い下がってくるな。 こういう奴は断んのがメンドイから嫌い

別に俺じゃなくてもいいじゃん。

「その仕事は何すんのかしらねえけど。俺、家と学校以外に定期的に
よらなきゃいけない場所作る気無いし。」

「では、私が貴方の家に……」

「却下、てか赤の他人なんか家に止めるなんて出来る訳ないだろ。」

女子が俯いて何も言わなくなったのを確認してから、方向転換して
裏門に向かう。

あっ、鍵開いてるけど隙間小さっ。
開けなきゃだめかメンドイ。

「学校の……」

門に手をかけたところで、女子が口を開き始めた。
めんどくさいけど、一応振り返る。

「学校の中でなら、働いて頂けるんですか……？」
こいつはスッポンか、いいかげん相手すんのがだるくなってきた。

「クラス一緒ならある程度出来るんじゃない？ だけど、俺学校生活邪
魔されんのヤダだから。」

「……夜は？」

「夜は学校いらんないし。」

「夜の間、学校に居られるようでしたら私の付き人をやって頂けま
すか？」

「それなら別にいいけど。」
そんな事が出来るんだったら。

自分で不可能な条件を提案してくれたし まあ、そっちの方が楽だ
からいいけどさ。

仮に出来たら出来たで、登下校とかメンドイのが無くなるから

百歩ぐらい譲ったら悪くない条件かもしれないし。

ついでに言うと

そのまま門を押して学校の外に出た俺は　その女子の浮かべた楽しげな笑みを見ることが出来なかった。

いや、見たからといって未来が変わったとはぜんぜん思わないけど。

その5 予言じゃなくて確信（後書き）

サブタイトルは御題サイトから貰ってきてます。

配布元 遙彼方

その6 不思議不可思議可視不可視

「……貴方の特技は何ですか？」

「暇を潰す事。」

登校

教室に行つて席につこうとしたら、席までの道を塞ぐような車椅子。あの長い階段を登りきつて足に疲れが溜まってんのになんで直ぐに座れない だりいし
しかもいきなりぶつけられた質問に即答したのに、これ見よがしにため息吐かれなきゃいけないんだ。

「もつとこう……例えば楽器がものすごく上手だとか、運動神経が抜群とか。」

「前者なら音楽学校、後者なら運動系の学校行ってるわ。」

もつともだと思つたのか、車椅子娘が黙つた。

今の内に遠回りして自分の席に向かつて只今車椅子の背後。

ようやく腰が下ろせると、荷物を机の横に引っ掛けて椅子に倒れかかるように座る。

あゝ、極楽 極限に楽。

「なにかこう……人と違う何かとか無いですか？ 無類の個性みたいな。」

あつ、まだ居たんだ。

「日本の学校に通つてる時点で個性なんぞ埋もれるって。」

素晴らしき出る杭は打たれる 没個性推奨

個性がなけりゃ、最初から世間にレールが敷いてある↓めっちゃくち

や楽。

「趣味とかないのですか？」

「暇つぶし。」

「……………すみません、もう一度特技を教えてくださいいただけますか？」
「暇潰し。」

ああ、頭痛がするみたいだな。はやく教室戻った方がいいぞ。（棒読み　すごく棒読み）

「…………放課後、屋上に来て下さい。これ扉の鍵ですから。来なかったら貴方が変態だという噂を全力で流すので必ず来て下さい。」

そのまま自分で車椅子の歯車を回して教室から去って行った。

あとに残されたのは銀色の鍵が一つ。

どうやって手に入れたのかは知らないほうがいいだろう、きっと面倒事だ。

「今の子知り合いなん？」

車椅子の陰に隠れて見えなかった大翔が俺に聞く。　てか　居たんだ。

「いや、別に。」

「それにしちゃ、やけに親しげだったじゃん。俺、嫉妬しちゃうぜ？」

いや、その表情読めない笑顔で言われても全く説得力がないし。お前に嫉妬されてもぜんぜん構わないし、あくメンドそうだからヤダか。

「教室移動したって事は別のクラスの奴か、名前ぐらいは知ってる

でしょ。」

車椅子が出て行った出口を見ながら目の前の奴が言う。
はやく席替えしねえかな？　そもそも、何順なんだこの席順。

「しらねえって、名前も。」

「そっか。んじゃ、俺のほうがまだ勝ってるんだな。」
勝ってるって何にだよ。

ポケットに鍵を突っ込みながら周りを見渡せば、女子グループがこっち見てる。

あゝ、目立ってる目立ってる目の前の奴のせいで　ヤダなあ。

「もう少ししないと先生こねえし、寝とけば？　なんか疲れてるっぽいし。」

ため息ついたら心配そうに言われた。

原因その1に言われてもな　いや、寝るけど。

「先生来たら起してやるよ、オヤスミ　トワ。」

「あゝ、ありがとさん。」

礼は一応言う　一応

眼鏡を外して机の端に置いとく　つけたまま机に伏せると案外痛い。
それから　腕を枕代わりにして、目を閉じる。

暗闇が視界を覆って10秒しないうちに、俺の意識はその心地よい闇へ堕ちた。

その6 不思議不可思議可視不可視（後書き）

サブタイトルは御題配布サイトから貰ってきています。

配布元 遙彼方

その7 振れた窓と歪んだ空

あの後結局、昼休みまで爆睡してた。

別に起してもらわなくて良かったんだけど一応大翔に起きなかった理由を聞いた。

「だってトワがものすごく綺麗な寝顔してたし、何しても熟睡して起きなかったしな。」

前者の理由は即刻記憶から削除した。

色々、疑惑と疑念と質問が沸き起こったけどメンドイから全部胸の中に閉まっと思った。

二度と開かないことを切実に願う。

それから時間が跳んで今は放課後。

屋上への扉前 車椅子が恨めしそうにこっち見てた。

「…………何 やってんの？」

「鍵。」

落ち込んだように頭を項垂れた相手がポツリと呟き始める。

「鍵一つしなくて……。」

その一つを俺に渡したから、入れなくて此処にいます。

てか、どうやって階段登ってきたんだこいつ 車椅子で。

「あの、鍵 ください。」

弱々しく言いながら、こちらに手を差し出してきた。

ポケットに入れっぱなしだった鍵を取り出し、手の上に乗っけてやる。

「ありがとうございます…。」

その鍵を手の中で半回転させてから、鍵が差し込む時のあの特徴的な金属音を響かせた。

そのまま、扉を押し開けて鍵も扉から回収してた。

刺しっ放しじゃないんだ。

「あの、お先にどうぞ。」

扉を手で押さえながら言う。

こいつ、使用人なんか雇っても絶対こき使えないよな。

そんな事思いながら遠慮なく扉をくぐる。

透き通るような水色の空 薄く広がる白い雲 昨日よりは少し柔らかな日差し

遠く聞こえるチア部の掛け声 春独特の青い香りを運ぶ風

絶好の昼寝場所&日より 寝たいな 眠いわ

「それで、お話しと言うのがですね…」

そうだ、こいつが居たんだ。

昼寝は一人でするもんだ、二人じゃ出来ない。

嫌々、振り返ると膝の上で両手を組んだ車椅子娘が居た。

車椅子娘って長い呼び名だよな、いちいちメンドクサイな。

「名前。」

唐突なこちらの言葉に間の抜けた表情をする相手
どうでもいいから早く答えてくんねえかな。

「あ、なまえ…：私の名前ですよね。…：私の名前は千村です。
千村^{ちむら} 未桜。それが私の名前です。」

未桜な未桜。

俺の自己紹介はかったるいし省略して、未桜の用件聞いてみる。
どうでもいいけど、話し始めるまでの躊躇いの時間がやたらと長いのはどうにかならないのか？
待ってる間が結構退屈なんだけど。

「この学校にはありがちな事に怪談があります。」
ようやく話し始めたのは良しとして、だから何？
こっちが怪訝な顔をしたのが伝わったのか、慌てて千村が言葉を繋げる。

「あ、それで…その怪談を調べたのですが少々様子がおかしいのです。」

「おかしいって何が？」

「その、音楽室のピアノの音とか毎晩電気のつく教室とかは分かります。」

まあ、定番だな。

「家庭科室の道具類が移動されているとか、この学校の物じゃない制服を着た人が

校門に消えていくとか、そういう怪談が多くて。」

「……………それ、怪談話じゃなくて唯の噂だよな？」

「いいえ、怪談です。」

「違うだr」

「いいえ、怪談です。」

……………負けた。

いや、負けてもいいけど 話が進むなら。

「この学校に誰か住んでいるようじゃないですか。」

「……………住んでるみたいだな。」

こう繋がるのか メンドイ

「校長には否定されちゃいましたけど、現場を押さえればどうにかなりそうじゃないですか。」

「ヤダ かつたるい 一人でやれ 俺は帰る。」

腕を出して鍵を催促する。 拒否された。

「駄目です。一人で階段登るの大変なんですし、いざと言う時逃げられないじゃないですか。」
え〜。

「そういう事なので、夜まで屋上で待ちましょうか。」

安心してください、パンと飲物ハイブテイはたっぷりありますから。」

その7 振れた窓と歪んだ空（後書き）

サブタイトルは御題サイトから貰ってきてます。

配布元 遙彼方

その8 記憶に染み付いた色合い

昼寝をすると夜に目が覚める 何時もの事 何時もと同じ空の色
黒と青と紫と何かを混ぜたような不思議で再現するの難しそうな夜色

この空の下で俺は毎日コンビニの素晴らしさを実感する。 あれは
本当にすごい。

今晚と次の晩も実感するはずだったのにな、何でこんなところで茶を
すすってんだ。

いや、美味しいけど 美味いんだけど

「さっ、そろそろ行きましょうか。」

水筒（魔法瓶）の蓋を閉めながら千村が言う。
リーダーシップとってくれんの？

「どこ行くんだ？」

「校内です。」

.....

「校内のどこに行くんだ？」

「そうですね.....音楽室なんか近いですしそこで良いん
じゃないでしょうか。」

今考えただろ 絶対

ノープランなんだな 計画とか無いんだな

こんな奴に嵌められたのか いや、ただ単に抵抗すんのがメンドカ
ッタだけだけど

押し倒して鍵奪うのが正統法なんだろうな

そもそも、女子と2人つきりっていうシチュでときめかない俺ってさ

別にいいけど。

「階段を下りるときは私を後にして下さい。見つかった時逃げられませんか。」

「それは俺にお前を降ろせと？」

「車椅子で階段が下れるわけが無いじゃないですか。」
だから どうやって上ってきた。

思うけど口に出さない 黙ってるうちに千村が鍵を開けた

「かったるいから車椅子ごとお前運んでいいか。」

「危ないから止めてください……あの、人の話は最後まで……あ
あ、私の意見は無視なんですね。」

顔見えないからどんな表情してんだかわかんないけど、とりあえず
落ち込んでんだろな。

両手が塞がってるから屋上の扉を脚で押し開ける。

車椅子も千村も重い 一応俺も男子だし平気といえは平気だけど
メンドイ 腕痛い カッターイ

という事でさっさとこいつを降ろすべく、駆け足で階段を降りて行く。

ちらりと見えた千村の表情が恐怖で引きつってたのは気のせいだ。

その8 記憶に染み付いた色合い（後書き）

サブタイトルは御題サイトから貰ってきてます。

配布元 遙彼方

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9020e/>

学校的イソウロウのやりかた

2010年12月19日02時37分発行